

社会の影描き話題

■老老介護 ■児童虐待 ■限界集落

大野・火葬場心中題材 漫画「よろこびのうた」

2005年に県内であった老夫婦が火葬場の焼却炉で亡くなった心中事件をモチーフにした漫画「よろこびのうた」（講談社）が、昨夏発刊された。焼却炉で老夫婦が心中した部分以外はフィクションだが、老老介護や児童虐待、限界集落における人手不足、耕作放棄、認知症など現代社会が内包する問題が盛り込まれ、発刊から半年たった今もネットを中心に話題になっている。（近藤洋平）



大野市であった事件をモチーフにした漫画「よろこびのうた」

作者「何か、伝われば」

モデルとなった事件は05年11月7日、大野市であった。午後2時すぎに、使用されていない火葬場の焼却炉の中から80代の老夫婦の焼死体が発見された。車内には「午後8時、妻とともに家を出る」「1時間ほど待ち、炭や薪で茶籠の準備をする。妻は一言も言わず待っている」「7日午前零時45分をもって、点火します。さようなら」といった走り書きをした給油伝票が残されていた。

当時を知る関係者によると夫婦は2人暮らし。妻は足が不自由で認知症、夫にも持病があった。自宅や田畑を市に寄付するとして遺言状を1年以上前に用意して市に郵送しており、老老介護の末の心中とみられるという。

漫画の舞台は「北陸の勝野市」。田園地帯の集落で火葬場から老夫婦の焼死体が見つかり、その半年後に、東京の記者が取材に訪れる—といった形で始まる。中心に至るまでの経緯を追っていく

ストーリーだが、同時に老夫婦の周辺で起こっていた、さまざまな社会問題も描かれる。

作者のウチヤマユージさんは、あとがきで「事件当時から『何か』が私の心を捉えて離さなかった。『何か』をパトタッチできていれば幸い」などと記している。

講談社イブニング編集部によると、電子書籍版のウェブ広告をきっかけに主にネット上で話題になっているという。「人生を終える」ということの深さをまざまざと感じさせられる「涙が出た」などの感想が寄せられている。

2016年7月発刊。コミック版は950円、電子書籍版は540円（ともに税込）。